

乳幼児教育相談における保護者支援（2）

～感染症拡大防止による休校期間中の支援および学校再開後の取り組みを通して～

山中健二・森敬子・土手信・佐藤幸子・桑原美和子

本校乳幼児教育相談では、実際の場面での遊びや活動を通して子どもたちと関わり、保護者に具体的な支援を行うことを大事にして取り組んでいる。しかし、令和2年度は感染症拡大防止のため、休校措置がとられたり学校再開後も活動が制約されたりし、これまで行ってきた支援が難しい一年となった。本稿では、休校期間中の支援および学校再開後における取り組みや感染症拡大防止のための配慮点をまとめ、その成果や今後の保護者支援においてどんな視点が重要になるのかを考察する。

キー・ワード：乳幼児教育相談 保護者支援 感染症拡大防止 休校・学校再開 つながり

1 はじめに

本校乳幼児教育相談（通称：けやきルーム）では、聴覚に障害のある乳幼児とその保護者、家族への支援を行っている。

グループ活動や個別指導を主な活動として、それぞれの親子に応じて具体的な支援を行っていくことを大切にしている。実際に遊んだり関わったりする場面を通して、子どもの様子について話し合ったり、保護者が家庭で実践できるように関わり方や言葉のかけ方などについて具体的に伝えたりしている。また、子どもの成長してきた姿とともに喜んだり保護者の思いや悩みを十分に聞き相談に応じたりしながら、前向きに子育てに取り組めるよう支援することを大事にしている。

しかし、令和2年度（以下、今年度）は感染症拡大防止のため、休校措置がとられ、学校再開後も制約のある活動となった。これまで大事にしてきた具体的な支援を継続して行うことが難しくなったが、そうした状況の中でどんな支援ができるかを模索しながら日々取り組んできた。

本稿では、今年度の休校期間中および学校再開後において、取り組んできた内容や感染症拡大防止のために配慮してきた点をまとめ、どんな成果があったか、また今後の保護者支援においてどんな視点が重要になるのかを考察する。

2 休校期間中の取り組み

令和2年2月末から令和2年5月末まで、感染症拡大防止のため休校となった。

この期間は、乳幼児教育相談としての活動も全て行えず、学校での直接的な支援ができなくなった。保護者も、外出自粛、在宅勤務、きょうだいの学校の休校といった負担を余儀なくされ、不安な思いを抱えながら子どもに関わっているのではないかと案じた。そこで、家庭で少しでも元気に楽しく安心して親子で過ごせるように、乳幼児教育相談としてできることをその都度検討し、以下のような取り組みを通して保護者支援を行ってきた。

(1) 保護者とのやりとり

① 電話でのやりとり

4月から5月にかけて、一人につき2回程度、電話でのやりとりを行った。家庭での子どもの様子、保護者の思いなどを聞き、子どもへの関わり方について助言したり保護者の悩みに応じたりした。また、補聴機器の不具合などの相談にも応じた。

限られた回数、時間でやりとりであったが、電話で話す保護者の声の調子に学校から電話がかかってきたことへの喜びが感じられることもたびたびあった。後日、「電話で直接先生の声聞くことができうれしかった。」との声も聞かれた。対面での話には及ばない部分もあるが、保護者の安心につながっ

24 乳幼児教育相談における保護者支援（2）

たという面では大きな効果があったと考える。

また、本校での支援を開始していない新規の相談者にも、月に1回程度こちらから電話をかけ相談に応じた。保護者としては、聴覚に障害があることがわかり不安を抱え、早く学校を訪れて相談したい、子どもに何をしてあげればよいかわからないという気持ちでいることと思われた。電話では、その都度子どもがどんなふうに成長してきているか、どんなことをしてあげると楽しむかなど聞くようにした。そして、子どもが喜ぶことをたくさんしてあげたり、表情をよく見せて笑顔で話しかけてあげたりするよう話し、そうしたことがコミュニケーションの豊かさにつながっていくことを伝えた。補聴器の試聴をどんなふうにすすめていくかといったことも詳しく説明すると安心した様子がかがえた。

② メールでのやりとり

休校期間中は教員も在宅で勤務することもあり、出勤日における電話での支援は限られたものとなった。そこで、必要に応じてメールでも保護者からの相談や連絡に応じることにした。

文面でのやりとりにおいては、微妙なニュアンスが伝わらなかつたり誤解を招いたりすることもあるため、丁寧に文章を作成したり必要に応じて担当者同士で内容を確認したりしながら慎重に対応するようにした。保護者が不安に思っていることや詳しく説明する必要がある内容については、連絡する日時をあらかじめ保護者とメールを通じて相談し、電話をかけて直接話をするようにした。

③ 郵送での「週の記録」のやりとり

通常の保護者支援の一つとして、「週の記録」のやりとりを行っている。「週の記録」には、その週に心がけたこと、きこえや補聴機器の様子、親子でのやりとりの様子などについて保護者が記入し、それを週に1回提出してもらっている。通常は、担当者がコメントを記入し、直接話をしながら保護者に返している。この「週の記録」は、保護者自身が子どもの成長に目を向けたり、家庭での取り組みや悩みな

どについて担当者と相談するきっかけになったりと、保護者支援としてとても大事にしている。

休校期間中も熱心に記録を続けている保護者もいると考え、希望者には「週の記録」を郵送してもらうこととした。4月に保護者向けに送った郵送物の中に学校宛の宛先シールを貼った封筒を同封し、送る作業に負担がかからないようにした。届いた記録については、担当者がコメントを記入し郵送した。

提出された記録からは、それぞれ工夫しながら家庭で過ごしていることをうかがい知ることができた。家庭での過ごし方として参考になることも多く、「けやきだより」（後述）に掲載し郵送して他の保護者に紹介したものもあった。

後日、「先生の手書きのコメントがうれしかった。」「学校での活動がなく不安な日々を過ごしていたが、週の記録のやりとりが心の支えになった。」と話してくれた保護者もいた。

④ Google フォームを利用した支援

「週の記録」のやりとりでは、学校に郵送されたものを教員が出勤した日に受け取る必要があったため、返送するのに時間がかかることがあった。

そこで、5月から Google フォームを利用した支援も開始した。フォームについては、週の記録をもとにほぼ同様の項目で作成した。利用期間は、学校再開までの休校期間中とした。

個人情報の保護を考慮し、名前はひらがなで下の名前のみ記入すること、名前以外の項目は個人名や場所の名称などの個人が特定されるような表記はしないこととした。またIDとパスワードをかけ、担当者のみ内容を見ることができるようにした。

家での様子を Google フォームで送ってもらい担当者がメールでコメントを返信した。在宅勤務のときもそれぞれの担当者がフォームを見ることができ、すみやかに対応することが可能となった。

Google フォームでのやりとりを開始したあとも、メールや郵送での「週の記録」のやりとりも引き続き行った。利用しやすい方法を選択してもらい保護者からの相談や連絡に応じた。

(2) 郵送による支援

① けやきだより

通常月1回発行している「けやきだより」を郵送で送ることとした。

4月号では、新年度にあたり担当者の紹介と挨拶を掲載した。また、「たのしくあそぼう～ふれあいあそび～」と題して、親子で楽しくふれあって遊べるよう、年齢に応じた遊びを紹介した。4月号とは別に、歌あそびの紹介のプリントも送った。内容は一般的によく知られているもので楽しめるものとした。

5月号では、郵送で送られてきた「週の記録」から、それぞれの家での過ごし方や子どもの様子などを紹介した。掲載にあたっては、保護者の了承を得た。また、年度初めに行っている講座に代わるものとして、各年齢における子どもの育ちや日々取り組みたいことなどについて資料を作成し掲載した。

② DVD

親子で楽しんで関わる手立てとなるようにDVDを作成し郵送した。4月と5月に1枚ずつ送った。

1回目(4月)は、楽しく踊ったりリズムをとったりして親子で遊べるように、ダンスと体操を収録した。2回目(5月)は、体操の他に、ペープサートを使ったお話、紙コップを使って作るおもちゃの紹介(別紙で作り方を同封)、親子での関わり方の講義を収録した。いずれも担当者が出演して録画した自作のものを送った。

保護者からは、「何度も見て覚えて踊っていた。」「知っている先生が出てくるので楽しんで見られた。」「DVDから覚えた言葉もあった。」「保護者自身も気持ちが落ち込むことがあったが、きょうだいみんなで見楽しむことができて助かった。」「先生方が一生懸命作ってくれたのが伝わってきた。」などの声があった。また、「けやきルームの先生やプレイルームが映っていて、学校には行かないのだけど子どもが学校のことを忘れずつながっていたように思う。」といった話をしてくださる保護者もいて、家庭で楽しむだけではなく学校と家庭とのつながりを感じるものとしても一つの役割があったようである。

3 学校再開後の取り組み

6月から学校が再開されることとなり、保護者や子どもたちが安全、安心に活動できるようにどんなことに取り組んでいけばよいかその都度話し合いを重ね、以下のような取り組みを行ってきた。

(1) 学校再開(6月)

学校再開にあたり、当面グループでの活動は行わず、個別指導のみとした。6月は、一人につき2回程度行った。取り組みの内容、留意した点等については、以下の通りである。

- ・通常の個別指導では、午前午後各2枠の時間を設けて、1時間ずつ行っている。今回は、他の親子との接触機会が少なくなるように、午前午後各1枠(10:00~11:30、13:00~14:30)とした。3部屋のプレイルームを利用し、午前午後各3人ずつ行った。一人につき来校する回数が少なくなるため、十分支援ができるように時間を1時間半とした。午前の個別指導が終了した時点で部屋の消毒を行い、午後の子どもを迎え入れた。使用した玩具も毎回消毒を行った。
- ・休校期間中の子どもの様子や保護者として感じてきたことをよく聞くように心がけた。子どもの成長した姿を伝えるとともに、保護者自身が家庭で一生懸命子どもと関わり取り組んできたことを労った。また、保護者が不安に思ってきたことや悩んでいることによく耳を傾け、前向きに取り組んでいけるよう相談に応じることを中心にすすめた。
- ・なるべく担当者と親子が近距離で関わらないようにするため、親子での関わりを中心とした活動とし、その中で関わり方や言葉のかけ方などのアドバイスをするようにした。室内にこだわらず、外遊びや散歩などの活動を取り入れることもあった。
- ・限られた時間の中で効率的に話をすすめるため、休校期間中のきこえの様子、耳鼻科での受診の様子、補聴機器の具合などについて記入する用紙をあらかじめ郵送で送り、記入したものを提出してもらった。個別指導の中で、補聴担当者が補聴機器の点検や特性検査を行い、不具合がないか確認

26 乳幼児教育相談における保護者支援（2）

した。また、聴力測定も行い、必要に応じて補聴器の調整を行った。

- ・年度初めの年齢ごとのオリエンテーションは行わず、個別指導の時間の中で必要なことを連絡した。
- ・感染症防止のため、担当者は手洗いや手指消毒をしっかりと行う、マスクやマウスシールド等を着用する、室内の換気を十分に行うこととした。また、保護者にも、マスクやマウスシールド等を着用する、登校したら親子とも手洗いや手指消毒をする、水分補給以外の飲食はしないなど、依頼した。
- ・密集を避けるため、1学期は保護者講座、懇談などの行事は行わないこととした。

(2) グループ活動の再開（7月）

6月は個別指導のみでの活動を行ってきたが、回数や頻度の少なさから継続的な支援が難しく感じる面もあった。また、感染状況も少し落ち着いてきたことから、グループ活動の再開を考え、活動の形態や内容、配慮点などについて検討を重ねた。7月は、以下のような配慮をしてグループ活動を行った。

- ・密集を避けるため、1グループあたり最大3名の少人数でのグループを編成した。
- ・接触機会を少なくするため、3部屋のプレイルームのうちの中央の部屋を空けて両端の2部屋を使い、一日2グループでの活動とした。通常は毎週来校していたところが分散での活動となり、一人あたりの来校日は少なくとも1日を減らさざるを得なかった。
- ・活動内容は、手遊び歌や製作など、比較的静かに行えるもの、また担当者子ども、あるいは子ども同士が距離をとって行えるものを中心とし、密接に関わるような活動は避けるようにした。
- ・通常の活動では、1歳児と2歳児のグループは、昼食をとり午後までの活動を行っているが、午前中だけの活動とした。
- ・ロッカーやタオル掛けは、距離を置いて使用できるように間をあけて場所を指定した。2歳児はそれぞれの子どもに決められているマークを、1歳児は顔の写真を貼ったり札をかけたりにして、子どもが自分の場所がわかるようにした。

(3) 2学期以降の取り組み（8月末～）

2学期以降も、活動時の親子の様子や社会的な感染状況などを考慮し、その都度活動の内容や形態を見直しながらすすめてきた。

① グループ活動

引き続き少人数でのグループ編成で活動を行った。感染拡大防止については、7月と同様の取り組みを2学期の間も続けた。

2歳児については、子どもたちが活動する時間が十分にとれるよう、保護者とも相談して12月から軽食を持ってくる日を設けた。感染防止のために、軽食は短時間で食べられるものにする、親子で1台ずつテーブルを使う、十分距離をとってテーブルを配置する、食べる前に親子でしっかり手洗いをする、食前食後にテーブルやテーブル周りの消毒を行うなどの対策をとった。今後の実施については、感染状況に応じて検討していきたいと考えている。

② 行事

1学期は、お散歩や幼稚部の運動会や夏祭りへの参加などの行事（いずれも2歳児）を見合わせた。これらの行事は、子どもの興味を広げたり、親子で楽しく関わったりする活動となるもので、大事な支援の一つとして例年行ってきたものである。

2学期は、通常のグループ活動に加え、行事も行えないか検討し、お散歩（2歳児のみ）とお楽しみ会（年齢ごと）を行った。

・お散歩（2歳児のみ）

例年5月に2歳児全員で学校の近くの江戸川の川原までお散歩に行っている。今回は、6つのグループを2グループずつに分けて9月に行った。

鉄橋を走る電車や水上スキーの様子を見たり、広場を走ったり、虫や花などを見つれたりしながら、親子で楽しい時間を過ごすことができた。

例年はお弁当を持っていくが、今回はおやつ一つのみとし、消毒用ウェットティッシュなどもそれぞれ持参してもらい、感染防止に努めた。

お散歩を通して、「日常の何気ないことにも親子

で目を向けるきっかけとなった。」「その後楽しんで歩くようになった。」などの声も聞かれ、実施した成果が感じられた。

・お楽しみ会（各年齢ごと）

12月には、年齢ごとにお楽しみ会を行った。今回は、1回あたりの参加人数が多くなならないよう分散して行った。保護者の参加については、子ども一人につき保護者1名での参加をお願いした。また、密集を避けるため人数に応じて広いホールや遊戯室などを利用して行った。

例年は、自由遊びや子ども同士が交わって遊ぶ活動も行っているが、密集を避けるため、手遊びやペープサートによるお話しなどの座って行える活動を中心に行った。

プレゼントをもらう場面では、自分からプレゼントをもらいに行く子どもも多く見られ、その姿をうれしそうに見ている保護者も多かった。通常のグループ活動とは違う子どもの姿や成長が感じられる活動となった。

③ 保護者講座、懇談

通常は、グループ活動後に懇談を行い、その日の子どもの様子を話したり、悩んでいることや家庭で取り組んでいることの情報交換をしたりしている。また、保護者が聴覚障害についての理解や知識を深め見通しをもちながら日々の子育てにあたっていけるよう、年間を通して保護者講座を開いている。

学校再開後、「休校期間中は、近所の友だちと会う機会があっても同じ立場の保護者同士で話をする機会がなかった。」という声が保護者からあった。またグループ活動再開後も限られている活動時間の中では保護者同士で話す機会を設けることが難しかった。また、今年度は保護者講座をすべて見合わせているが、「今までは講座を通して勉強する機会があつてよかった。」「関わり方を振り返るよい機会となっていた。」などの声も聞かれた。

そこで、9月に最大6名程度で分散して講座と懇談を行う機会を設けた。通常保護者講座はグループ活動とは別の日を設定し行っているが、今回はグル

ープ活動の日を利用して行った。「身の回りのことを自分でする」というテーマで講座を行い、その後保護者同士で自由に話す時間を設けた。

講座の内容を受けて保護者が意識して子どもに関わるようになったり、生活習慣を身につけさせていくねらいを再度確認したりするきっかけとなった。また短い時間ではあったが、保護者同士で話す時間がもて、お互いに元気づけられる機会ともなった。

④ けやきだよりの発行

前述の通り、休校期間中のけやきだよりでは、「週の記録」から各家庭での様子を紹介したり、遊びや関わり方に関する資料を掲載したりした。学校再開後も、分散してのグループ活動のため保護者同士の情報交換の機会があまり設けられないこと、密集を避けるため保護者講座を開催することが難しいことから、引き続き週の記録からの家庭での様子や取り組みの紹介、講座に代わる資料の掲載をしてきた。

「週の記録」の紹介では、全員の紹介ができるよう配慮した。掲載にあたっては、その都度保護者の了承を得た。

けやきだよりは、毎月の発行を原則としているが、学校行事の都合上、9月と10月、11月と12月は合併号として発行した。3学期も引き続き発行していく予定である。

今年度これまでに発行したけやきだよりに掲載した資料の内容をまとめてTable 1に示す。

Table 1 令和2年度 けやきだより

4月	たのしくあそぼう ～ふれあいあそび～
5月	各年齢の子どもの育ちやねらい、 日々取り組みたいこと
6月	「きこえる」ってなんだろう？ きこえの仕組み・補聴機器・かわりについて
7月	言葉の育ちに大切なこと
9・10月	身の回りのことを自分でする
11・12月	パパのための育児講座

4 まとめと今後の課題

休校期間は約3ヶ月に及び、その間乳幼児教育相談として直接的な支援はできなかった。過去に例を見ない事態の中、何か一つでも支援につながる手立てはないかと常に考えながら、一つひとつできることを取り組んできた。ある保護者からは、「電話や郵送された手紙などを通し、気にかけてもらっている安心感を感じ、けやきルームを思い出しながら日々子どもと関わろうと思った。」という声もあった。家庭で親子が少しでも安心して楽しく過ごせればとの思いで取り組んできたことであつたが、学校と家庭のつながりを感じるものとして保護者が受け止めてくれたことに、違う視点での成果が感じられた。

また、学校再開後の活動では引き続き感染拡大防止に配慮し限られた時間や内容での支援となつた。少人数で分散してのグループ活動となり、一人あたりの来校する日も少なく、「通常通り通えていたら親子でもっと成長できたかと思うと、感染症によって通う回数が少なくなり残念に思った。」といった保護者の思いを聞くと、十分に支援ができなかつたもどかしさを感じた。一方、そうした状況の中でも、「みんなと会えてうれしかった。」「他のお母さんの関わり方を見て参考になることがたくさんある。」「子ども同士で遊んだり関わったりすることができて刺激になっている。」などの声もいただき、子ども同士、また保護者同士のつながりの大切さをあらためて知らされた。

このように今年度を振り返ってみると、これまでの普段の活動の中で、学校と家庭のつながり、親子同士のつながりがいかに大事なものであつたのかをあらためて感じる1年であつた。感染症に関する状況もまだ見通すことが難しい面があるが、つながりを大事にする視点をもって今後も保護者支援にあたっていきたいと考えている。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。